（様式３号）

学 位 論 文 の 要 旨

氏名　藤山　雄一

〔題名〕

頭部外傷例におけるParoxysmal sympathetic hyperactivityの実態
-山口大学脳神経外科の経験-

〔要旨〕

Paroxysmal sympathetic hyperactivity (PSH) は，重症脳損傷後に発作性に生じる頻脈・高血圧・過呼吸・高体温・発汗などの交感神経亢進症状と，過度の筋緊張亢進を特徴とする症候群である．しかし，頭部外傷に続発するPSHの本邦での報告は少ないため，当科におけるPSH症例の実態を検討した．

2013年1月から2018年5月までに，当科へ入院した頭部外傷例を対象とした．頭部外傷の治療経過中に，交感神経亢進症状や筋緊張亢進が見られた症例に対して，Baguley IJらの基準に準じてPSHを診断し，十分な鎮痛・鎮静と全身管理，及びブロモクリプチンあるいはバクロフェンの投与が行われた．PSH発症に関わる因子及び受傷後3ヶ月後の転帰に関連する因子については，臨床的特徴，生理・生化学，画像のパラメーターに基づき，多変量解析を用いて検討した．

対象患者97名中PSH発症群は11人で，発症率は11.3%であった．受傷後134±96.4 時間(5.6日）で診断されていた．Traumatic Coma Data Bank (TCDB)分類では，focal injury 7例，diffuse injury 4例で，magnetic resonance imaging (MRI)で診断された間脳/脳幹病変は2例であった．PSH発症群のうち，手術例は8例だった．PSH発症群は非発症群と比較し，若年者，GCS低値，凝固線溶異常例，頭蓋内圧高値例に有意に多かった．病変はfocal injuryがPSH発症群に有意に多かった．Glasgow coma scale (GCS) 低値，PSH発症群，diffuse injuryが，独立した受傷3ヶ月後の転帰不良因子であった．

当科のPSHの特徴は，これまでの報告と異なりfocal injuryに多く発症していた．受傷3ヶ月後の転帰に関しては，PSHの発症が重症度と独立して転帰不良に関連していた．

（様式９号）

学位論文審査の結果の要旨

令和３年２月18日

報告番号	甲 第 1606 号	氏　名	藤山　雄一
論文審査担当者	主査教授	鶴田良介	
	副査教授	田邊剛	
	副査教授	石原秀行	

学位論文題目名（題目名が英文の場合、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。）

頭部外傷例におけるParoxysmal sympathetic hyperactivityの実態　-山口大学脳神経外科の経験-

学位論文の関連論文題目名（題目名が英文の場合、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。）

頭部外傷例におけるParoxysmal sympathetic hyperactivityの実態　-山口大学脳神経外科の経験-

掲載雑誌名　山口医学　（2021年３月　掲載予定）

（論文審査の要旨）

Paroxysmal sympathetic hyperactivity（PSH）は，重症脳損傷後に発作性に生じる頻脈・高血圧・過呼吸・高体温・発汗などの交感神経亢進症状と，過度の筋緊張亢進を特徴とする症候群である．しかし，頭部外傷に続発するPSHの本邦での報告は少ないため，当科におけるPSH症例の実態を検討した．

2013年１月から2018年５月までに，当科へ入院した頭部外傷例を対象とした．PSHはBaguley IJらの基準に準じて診断し，十分な鎮痛・鎮静と全身管理，及びbromocriptineあるいはbaclofenの投与が行われた．PSH発症に関わる因子及び受傷後３ヶ月後の予後に関連する因子については，臨床的特徴，生理・生化学，画像のパラメーターに基づき，多変量解析を用いて検討した．

対象患者97名中PSH発症群は11人で，発症率は11.3%であった．受傷後134±96.4時間（5.6日）で診断されていた．Traumatic Coma Data Bank（TCDB）分類では，focal injury 7例，diffuse injury 4例で，magnetic resonance imaging（MRI）で診断された間脳/脳幹病変は２例であった．PSH発症群のうち，手術例は８例だった．PSH発症群は非発症群と比較し，若年者，GCS低値，凝固線溶異常例，頭蓋内圧高値例に有意に多かった．病変はfocal injuryがPSH発症群に有意に多かった．Glasgow coma scale（GCS）低値，PSH発症群，diffuse injuryが，独立した受傷３ヶ月後の予後不良因子であった．

当科のPSHの特徴は，これまでの報告と異なりfocal injuryに多く発症していた．受傷３ヶ月後の予後に関しては，PSHの発症が重症度と独立して予後不良に関連していた．

本研究は，頭部外傷後に起こりうる症候群の臨床的特徴や転帰に関連する因子を明らかにした論文である．
よって，学位論文として価値あるものであると認められた．

備考　審査の要旨は８００字以内とすること。